



**「あなたの指導を受けた
学生は着眼点が変わる」
と言われたので、
その理由を考えてみました**

ある地方の病院の実習担当者
匿名

私は、とある地方の精神科単科病院で実習担当をしている看護師です。少し前、実習に来ていた学生たちの学校の看護教員から、「Xさん（筆者）の指導を受けてきた学生って、なんであんなになって実習から帰ってくるのか不思議なんだけど」と言われました。その教員曰く、「Xさんが受け持ってくれた学生は、うまく説明できないんだけど……着眼点が違うというか……自由な発想で、教員のほうが驚かされる」とのこと。

自分の実習指導がどんなふうに独自なものかなんて自分ではわからないけれど、私が何をしているのか、どう学生を見ているのか、その教員と少し掘り下げて話をしてみたことを、一読者として投稿してみたいと思います。

その前に。皆さんの病院の「実習指導者」の役割って、どういうものですか？ 主任や師長になるための“ステップ”だったりしませんか。言ってしまうと、出世のための腰掛けというか。中には熱心に取り組んでいらっしゃる指導者さんもいるかもしれませんが、役目以上のものではないことが多いかもしれません。そんななかで変わり者の私は、今年で実習指導者5年目になろうとしています。なぜ、そんなに実習指導にハマっているか。実は、指導者になるために受けた研修があまりにも面白かったか

らでした。

当初、研修に行けと上から命令があったときには、「指導計画書がつくれるようにならないといけならしいよ」という噂を聞いていたため、めんどくさいなあとは思っていませんでした。ところが、参加した研修の講師はまず、「出会ってもいない学生の計画を立てて、何の意味があるのよ」と仰っていました。……あれ？ 思ってたのと違って、すごい。そして、ひたすらロールプレイばかりをやっていました。他の研修参加者たちも精神科の看護師ばかりだから、患者役も学生役もうまい。そして、そのロールプレイを四方八方から携帯で撮影されるんです。嫌なんだけれど、皆でそれを見る、の繰り返しです。

振り返ってみると、これが自分の実習指導の「核」を作ったと思います。看護師として自分が無意識にやっていることをまずは知る。それを見てどう感じるか。「こんなに太ってたんだ、私」「自分の声が、苦手だ」なんていう受講生もいたりして、それこそ自由に感じたことを言い合いました。もちろん、話し合う中で精神科看護にかなり重要な点も、深まっていかがるを得ません。声の大きさ、対峙する相手との体格差、距離……あるいは、自分では好きじゃない自分の一面というように、あらゆる“超客観”に、ただただ晒されます。自虐です。言葉でいくら綺麗なことを言っても、自分の存在のカッコ悪さ、通用しない世界を目の当たりにします。

私は、音楽と映画をこよなく愛しています。夜勤の後には3時間くらい、音楽を聴きながら車を走らせます。そこで、今日病棟であったこと、患者のこと、実習中だったら学生のことを思い出し、振り

〈編集室より〉あなたの「声」をお待ちしています。掲載記事に対する感想／著者への手紙／雑誌への意見・提案・取り上げてほしいテーマ・情報提供／「こんな経験をした」「読者の皆さんはどう思う？」など、なんでもOK。掲載分には医学書院特製図書カードを進呈します。実名掲載が基本ですが、匿名の場合はその旨を明記ください。

【投稿先】E-mail : seikan@igaku-shoin.co.jp

返り、考えたりしています。曲がランダムに流れるようにしてあると、同じことを思い出していても、曲が違えば見え方がぜんぜん変わるので不思議ですよね。

映画のシーンも、その多くを音楽がつくっています。高校時代からよく見ていた映画のワンシーンも、バンドが演奏している映像に合わせて喧嘩が始まったり、車が崖から落ちていったり。『13日の金曜日』だって、音楽が怖いのであって、プロ野球の中継をラジオで聞きながら見ても、ホラーではありません。

患者さんから、「殺してやるよ」と暴言を投げつけられる日もあります。帰り道、そういう曲が流れてしまえば狂気シーンですが、サイモンアンドガーファンクルを流すと、その人の人生の、すごく大事なハイライトのようにも映るでしょう。

暴れる患者さんの足元から“撮る”（見る）か、はたまた全身をなめるのか。さらにはカメラをもっと引くこともできます。病棟を突き抜けて病院も突き抜けて、街やその人の家に行ってしまうまでの自由度で画角やアングルを変えてみます。すごく簡単に言ってしまうと「多角的に捉える」ってことなのかもしれませんが、こうすることで、どんなに深刻なシーンのアセスメントも、よしあしを見極めるのではなく、映画のように見るができます。

ロールプレイ三昧の研修は、無意識のうちに染み

ついていた「見かた」を含めた自分のなかの精神科看護師像を一掃し、私の看護をより自由にしてくれたのでした。「●●を一文字で表そう」みたいなワークもありました。つまり感性重視で、それぞれを認め合うことに徹底したものだっただろうと思います。

私の実習指導もこのスタイルを入れつつオリジナルになっていますが、大事にしていることと言えば「味方、仲間がいる環境、一歩踏み出せる安心感」ということに尽きます。

音楽や映画に影響を受けてきたように、もう1つ私に絶大な影響を与えたのはプロレスです。試合での駆け引き、マイクパフォーマンスは私のコミュニケーション実践の引き出しを増やし続けてくれます。学生にも患者にも、プロレスラーのモノマネをすると、「なんだこの人は」という微妙な感じになる。でも、それをやり続けるとコミュニケーションになります。「よくわからんけど、またあのポーズ、またあのセリフを言っているな、この人は」というように。学生にも患者にも、最終的に一歩踏み込ませる“隙”を見せておくことが、“好き”につながるんじゃないかな！（なんちゃって）。プロレスには、相手の技をどれだけ上手く受けてダメージを殺し攻めるか、という不思議なロジックがあるのです。

実習指導にひそやかに情熱を注いでいる方がいたら、ぜひ誌面で意見を交わしませんか。

精